

「問題解決型救急初期検査」

田中 和豊 著

聖路加国際病院・呼吸器内科

堀之内 秀 仁

数ある検査に関する類書をイメージして本書を手にとった読者は、ちょっとした肩すかしを食らうことになる。

それは、ページを開き、目次を見たときに既に明らかである。そこには、従来の書籍にありがちな「血算、生化学検査、凝固検査、内分泌代謝検査…」といったありきたりな項目ではなく、患者の訴える主観的データ“以外の”すべての情報に挑むために必要な項目が並んでいる。本書のようなハンディな書籍で、なおかつ「検査」と銘打っていないながら、バイタルサインや身体所見に関する記載にこんなにもページを割いたものがかつてあったのだろうか？

著者も巻頭で触れているとおり、本書は『問題解決型救急初期診療』と密接に関係し連環している。『問題解決型救急初期診療』が縦糸であれば、本書はその横糸といえる位置付けとなり、逆に本書から入れば、

『問題解決型救急初期診療』が横糸のようにも思える。それほど、本書は「単なる検査書籍」ではない、臨床の書なのである。

個々の項目に目を向ければ、検査値に基づく鑑別や診断分類が数多く網羅されているのは当然として、それらの間を結ぶ著者のコメントが、そこにある膨大な文字列を生きた情報として読者の思考過程に流し込んでくれる。まさに『問題解決型救急初期診療』に最初に会ったときに得た感覚、すなわち熟練した指導医に直接指導を受けているような「納得感」だ。

本書の特徴として評価できる点はほかにもある、それは参考文献の多さである。検査書籍では、ごく基礎的な参考文献が上がることが多いなか、本書ではむしろそのような参考文献は少なく、最近の Key Paper をふんだんに紹介している。敗血症や ARDS の項目などはその最たる

もので、本文中にこれまでの研究の流れを盛り込み、「なぜ今この検査所見、治療が注目されているか」を紐解いてくれる。

また、ちょっと粋に感じる部分としては、各章のなかにある、他の項目とはやや独立した「豆知識」的な項目である（例：「一発熱」、「ショック・リバー」、「あきみちゃんくろし」）。筆者自身の言葉で説明される、臨床のちょっとした工夫であったり、知っていることで診療に厚みが増すポイントだったりする。

検査の意味と位置付けを生き生きと著した、ただそれだけでなく、検査の背後にある日常診療の躍動を垣間見せてくれる一冊である。後輩に薦められる良書がまた一冊増えたことを歓迎したい。

●B6 頁544 2008年 定価5,040円
(本体4,800円＋税5%)

——医学書院 刊(☎03-3817-5657)